

# 阿嘉島の蝶 part 5

## 赤斑型のシロオビアゲハ

Butterflies in Akajima Island, Part5

A red spotted type of *papilio polytes* Linnaeus

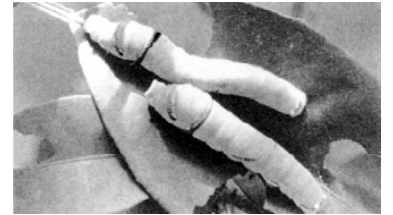
T. Kamibayashi

アゲハチョウといえば、本土では一般的にアゲハ（ナミアゲハ）のことを思い浮かべますが、阿嘉島ではあまり見ることはありません。これは、沖縄などの亜熱帯地域への侵入の歴史が浅いためと考えられています。また、同じ食樹をめぐって、他のアゲハチョウ類との競争に負けているのかもしれませんが。沖縄本島や阿嘉島で多く見られるのは“黒いアゲハチョウ”たちです。中でも、近年まではカラスアゲハの亜種とされていた沖縄の固有種オキナワカラスアゲハや、本土産のものより沖縄産の方が白い模様が鮮やかなナガサキアゲハの雌など（雄の黒い個体は外見的な地域差はない）の美麗種がマニアの間で珍重されています。今回はこれら“黒いアゲハチョウ”たちの仲間でもっともポピュラーな、シロオビアゲハのお話をしましょう。

シロオビアゲハは奄美諸島以南に分布する東洋熱帯型の蝶です。阿嘉島では南国の風景らしく、ハイビスカスやブーゲンビリアで蜜を吸う姿をよく目にします。また、研究所のシークワーサーの木で育つ

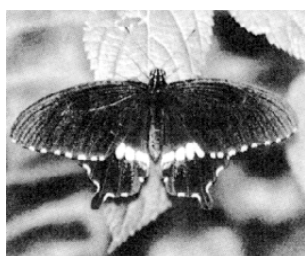
幼虫を、何度か観察できました。

シロオビアゲハの雄は黒地に白い帯という、和名どおりにシンプルな模様をしています。雌には



研究所のシークワーサーの木で育ったシロオビアゲハの終齢幼生

白い帯のものと赤い斑点模様のものの2つのタイプがあります。赤斑型の雌は、1968年頃から国内で採集されるようになりました。これは、台湾などの南方面から、赤斑型の遺伝子を持つ個体が侵入したためと考えられています。シロオビアゲハの交配実験で、雄は赤い色の遺伝子を持っていても赤斑は発現しませんでした。雌はどちらか一方の親が赤い色の遺伝子を持っていると必ず赤斑が発現したそうです。雌の場合は赤斑型のタイプの方が遺伝的に優性であると言えます。しかし、実際に自然界で目にするのは白帯型の雌がほとんどなのです。その理由はよくわかっていませんが、シロオビアゲハの雄は、赤斑型の雌より白帯型の雌を好んで求愛したという実験結果から、赤い色の遺伝子は残りにくいという説があります。赤斑型の雌は毒蝶のベニモンアゲハに擬態していると言われています。そしてどういう因果か、南方性の蝶だったベニモンアゲハが八重山諸島に定着しはじめたのも赤斑型のシロオビアゲハが見られるようになったのと同じ1968年頃なのです。



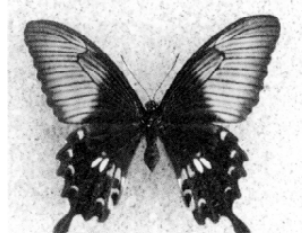
シロオビアゲハ



シロオビアゲハ (白帯型)



ベニモンアゲハ



シロオビアゲハ (赤斑型)

ベニモンアゲハ: 1968年に八重山諸島、1972年に宮古諸島に定着。沖縄本島周辺にはいない。幼虫の食草リュウキュウマノスズクサにはアルカロイド毒が含まれるため、毒蝶となる。捕食者はこの蝶を一度食べると、学習効果により攻撃しなくなるが多いらしい。